

平成 30 年度 第 12 回 昭島市社会教育委員会議・要点録

開催日時／会 場 平成 31 年 3 月 18 日（月）午後 7 時 00 分～9 時 00 分 市役所 205 会議室
出席者 谷部議長、中村副議長、佐伯委員、長瀬委員、稲垣委員、濱田委員、
松本委員、二ノ宮リム委員
欠席者 齋藤委員、吉村委員
事務局 吉村社会教育係長、来住野社会教育主事

1 開 会

＜配付資料＞

- 資料 1 平成 31 年度生涯学習部における主要事業について
資料 2 平成 31 年第 1 回昭島市議会定例会代表者質問及び一般質問等について
資料 3 平成 30 年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会第 2 回理事会

- ・昭島市月間行事予定表 3 月
- ・とうきょうの地域教育 No. 135
- ・あきしまの教育 第 95 号
- ・あきしまの青少年 No. 253
- ・青少年委員だより 第 24 号
- ・あきしま体協だより 第 30 号
- ・江戸の和算から学ぶ
- ・岐路に立つ公民館―東京都昭島市社会教育調査Ⅱ―

2 報 告

(1) 平成 31 年度生涯学習部における主要事業について（資料 1）

（事務局より資料の説明）

(2) 平成 31 年第 1 回昭島市議会定例会代表者質問及び一般質問等について（資料 2）

（事務局より資料の説明）

(3) 平成 30 年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会第 2 回理事会について（2/26）（資料 3）

- ・ 2021 年度関東甲信越静社会教育研究大会（東京大会）について
昭島市は実施年度に副会長市となるため、実行委員として参画することとなった。
- ・ 平成 31 年度定期総会議案書案について

(4) 小学生国内交流事業第 3 回運営委員会について（3/5）

議 長 事務局より事業実施の概要について、交流記録について、アンケートについて報告があった。今年度の交流事業の反省点として、壁新聞の大きさを統一してはどうか、掲

壁新聞の示期間が短いのではないか、今回は猛暑のためくじらパレードが中止となったので、今後の暑さ対策について意見があった。また、団長等の役割について引き継ぎ書(行動マニュアル)を求める要望があった。参加児童への対応についてだが例年、集団行動が苦手な児童への対応として事前に情報が必要という意見があった。アレルギー関係については情報の把握が徹底できていたとのことだ。2020年度はちょうど東京オリンピックの開催と交流事業の時期が重なることもあり、開催の可否について双方で検討中とのことだった。交流事業後の保護者アンケートについて、岩泉町側が回収率100%なのに対し、昭島市側は全員からの回答が得られていない。今後の事業運営のためにもぜひ回答してもらえようようにしてほしい。今年度も大きな事故やけがもなく無事終了でき、とてもよかったと思う。

(5) その他

- ・全国社会教育委員連合からの会費値上げに関する提案、及び、回答について

3 議 題

(1) 平成 31 年度昭島市小学生国内交流事業運営委員の推薦について

- ・稲垣委員、吉村委員を選出(平成 31 年度、社会教育委員が副団長を務める)

(1) 第 30 期社会教育委員のテーマについて(キーワード: ボランティア)

第 30 期社会教育委員会議が 2 年間の在任中に調査研究するテーマを決めるにあたり、会議の中でよく登場する「ボランティア」という言葉や活動の実態について社会教育委員の中である程度の共通認識を得ておきたいと考える。そこで、今回は各委員のこれまでの経験などを通して捉えている「ボランティア」について、出し合うことをした。

議 長 今後のあきしま会議では、これまで同様活動者の報告を聞き合うことをするにしても、社会教育委員として探究していきたいことを共有しておき、あきしま会議の中でそれを照らし合わせていくことで、次の建議につなげたい。

委 員 社会教育委員会議としてテーマにしていきたいことを決めていき、その中で今後のあきしま会議をどう位置づけ、あきしま会議の中で何をテーマにしていくかを考えて行くうえで、まず「ボランティア」について皆さんの理解を深めていくということかと思う。

議 長 私はボランティアとは無償の活動のことだけをいうのだと認識していたが、そうではないと理解した。これまで漠然と捉えていた「ボランティア」について、もう少しはっきりしたイメージを持ちたく、この機会に整理したいと考えた。

委 員 「ボランティア」と「市民活動」の違い。私の中では「ボランティア」として活動しているものと、「市民活動」としてやっているものがあるのだが、市民活動もボランティアに入るのか、それとも違うのか明らかにしたい。市民活動も手弁当で無報酬だ。ボランティア的な意味もあるが、そこにイデオロギーが関わってくるのでどうなのだろうか。

委員 信条を持って参加する形のものもあれば、トップダウンで義務的に行うものなど形は様々あるので、それらを羅列し、内容と市民活動的なものとのボランティアの差を比較してみてもどうか。

議長 「ボランティア」とは非常に便利な言葉ではある。広義であり、その言葉を使う人それぞれが認識している意味合いで使われているように思う。実は何かしらの区分があるのではないか。

委員 無償で行うのがボランティアだという捉え方もある。

委員 ある程度確立されたボランティア論があるのだが、ボランティアということテーマに入れていくのであれば、今、ボランティアについてどういう議論がなされているかを知る必要はある。

委員 例えば体育協会でいえば、役員は金銭的にも時間的にも無償で協会の運営を担っている。他市の体育協会では法人化も進み、役員報酬が出るところもあるようだ。法人化したところは市から施設管理を委託されているところが多い。それ以外では、選挙の運動員などもボランティアだ。

委員 文化協会では法人化の話はあまり聞かないが、自分はサロン活動をはじめたことにした。引きこもりの高齢者が外に出て交流ができるようにすることを目的に設立した。介護施設へも定期的に慰問活動をしている。それらも無償なのでボランティア活動と思っている。社会福祉協議会のボランティア団体に登録している団体では、年1回のこどもまつりの中でも出店するなどしており、そちらは正直赤字だ。

事務局 災害時のボランティアはしっくりくるが、自治会活動はどうか。自治会主催の地域の清掃活動、見回り活動はどうか。消防団活動はどうか。

委員 ただ、自治会は会費をいただいているということがある。

委員 消防団の活動は、入団して活動するのでボランティアというイメージはない。

事務局 しかし、消防団の活動は義務ではないと考えると、有償のボランティアともいえる。

委員 義務的なものとしては、学校のPTA。自治会もそうかもしれない。

議長 昔からある婦人会や子ども会は衰退の一途をたどっている。自治会の加入減少がそれを物語っている。そこでハートフル会員制度といって、70歳以上の方は役員免除する制度を導入したが、それでも減少に歯止めがかからない。

事務局 先日のあきしま会議の中でも、役員の成り手がいないために、後継者がいないというケースは確かに多かった。

委員 災害に遭わなければ、自治会の存在価値が認められないというのはどうなのだろうか。普段から横の連絡が重要だといっても、参加する人・しない人の意識に温度差がある。

委員 地域の自治会やコミュニティ形成の意義は防災・治安・子育てである。最近では、マンションや住宅地開発において販売する際、セールスの一環として、コミュニティ形成をサポートすることをつけていることがある。新しい自治会のあり方の提案であろう。コミュニティを持ちたいと思って家を購入するわけで、自主的か義務的かはその状況や団体の性格や個人のニーズとの合致によるが多々ある。

議長 自治会加入率は30数パーセントだそうだ。60数パーセントは加入していないわけで、

そこに補助金が出されるのはおかしいのではないかという声も聞く。一方、大きな団地やマンションでは、入居の条件になっているところもあるという。そういったところは加入率が90%を超え、資源回収奨励金の交付も大きいと聞く。地域によってもまるで違う。そう意味で自治会活動における負担や差が現実にはある。

委員 私に関わっている地域の自治会は、コミュニティ形成がセットになった住宅地で、ファシリテーターがついており、比較的多くの子育て世代退職世代の方々に構成されている。つながりたい人たちが集って、餅つきなど様々なイベントをしている。ただ、既存の自治会連合には入りたくないようだ。それは彼らのニーズに合わないという。新しい自治組織を作り始めていると感じている。

議長 ただ、そうした地域も35年以上たつと高齢化を迎える。そうすると、コミュニティは崩れていく。拝島第四小学校やつつじが丘南小学校も、わずか30数年で統廃合となった。非常に人口構成の変動に大きく影響される。

委員 高齢化したときに、再度地域のつながりを求めるというケースもあるが。

事務局 目的に基づくもの、ある活動に賛同して、特に役割が事前に決まっていなくても、その活動するものなどあると思うがどうか。

委員 目的があって、無償で活動した経験といえば、3.11の原発事故を受けて原発都民投票の代表者になって活動をしたこと。特に目的がなくというのであれば、学習サロンのフォローなどだろうか。行ってその場で自分のやることを見つけ、行なっている。

委員 小学校では学習として行なっているものが強いが、中学校になれば地域のためなどということが出てくる。総合的な学習の時間の中で、テーマを持って自分たちでどう解決していくかをグループで探究していき、活動に移すなどすることがある。その中では、地域安全マップを作ったりする。安全ではないと感じる理由は何かを考え、落書き消しをしたり、清掃をしたり、ポスターを作成して自治会に配付をお願いするなどしていく。授業時間外の活動は総合的な学習の時間がきっかけとなっていることがある。日常的なことでは、6年生が1年生のお世話をするなど身近なところからの経験もある。最近の子供たちは、自己有用感が低いと言われていて、自分が誰かの役に立っているという経験を学校生活の中で積んでいくことも大事だ。顔の見える関係の中でやれることがよい。

委員 地域の中学校でボランティアカードを作っており、年度初めに学校区の自治会に中学生のボランティアが必要なイベントはないか聞いて、1年間のイベントのボランティアを必要としている項目を出し、生徒がその中から何をするか選ぶという取り組みをしている。中学校の取り組みである。生徒たちを地域に出して地域を知ってもらうというもの。昨年度から始まった。「お祭りのかき氷」「餅つき」「防災訓練」などだ。大概日曜日や授業時間外の活動になるが、生徒たちが来る。翌日もまた来てくれるなど楽しそうにしてくれる。

委員 自分が人のために役立つと感じることは、とても大事なことだ。かなり必要なキーワードだ。自分が人の役に立つことによって、自分の存在感を知ることなのだろう。自己有用感が足りないというのはそういうことなのかもしれない。

委員 人の足りない自治会を動ける子どもたちとマッチングしていく仕組み。私たちとしては、大変ありがたく、いてもらえると助かる。

委員 子どもたちに助け合うことの大切さの理解につながる。

委員 この制度は何年続くかわからないが、基本的には決められた時間に担当教員と来て、手伝ってくれる。子どもたちは時間を超えて参加したがっている。

委員 大学生たちにこれまでのボランティア経験やイメージを聞いてみたところ、子どもの時に学校でやらされたボランティアが嫌だったという意見もたくさん出る。このことから、子どもだから大人だからというより、主体性・自主性をどこまで尊重されていたかのちがいののではないだろうか。大人も自分の主体性を・自主性が尊重され、自己有用感を得られる活動であれば楽しいし、そうでなければ楽しくないというのは、子どもも大人も同じではないだろうか。

委員 子どものときには純粋に何かの役に立ちたいという気持ちでいたのが、大人になるにつれ義務感や負担感が大きくなり、どこかでふと誰かの役に立っていると思えば立ち戻れるのではないかとも思うが、そういうことが日常の中に無くなってしまったのではないだろうか。

委員 私はこちらへ越してきたときに、自治会には入るものであると思っていたので、自分から加入を申し出た。なぜかと思えば、自分の親が自治会活動をしていたことから、そういうものだとして認識していたのだと思う。ボランティア観には家庭環境の影響もあるのかもしれない。

議長 今後の会議の日程等を確認して、本日の会議は終了する。

次回

4月18日(木) 午後7時より 昭和会館1階 洋室

5月23日(木) 午後7時より 市役所202会議室